

女主人公はまともじゃねえ！！

クロアブースト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

元ポケモン廃人だった青年は純粋に疑問に思う。

何故アニポケで一部の女主人公達はサトシ君と一緒に旅しなかったのか？

大人の事情とか、あるのかなあと安易に思ってた。

それを転生した挙句に何故か自分に弟子入りされた際に痛感する。

あ、こいつらヤベー奴等だと……

これはアニポケでサトシ君と同行しなかった女主人公達の理由を身をもってするポケモン廃人のお話。

※基本一話完結なので時系列バラバラです。一応登場キャラと登場作品を○で表示しています。

※ポケモン女主人公がぶっ飛んでるので苦手な方はブラウザバック推奨。

※ポケモンバトルではなく、オリ主と女主人公達のやり取りがメインなのでポケモンバトルを読みたい方はブラウザバック推奨。

## 目次

ベッドソムリエ ミツキ (USUM)	1
カレー狂いな天才少女 ユウリ (剣盾)	8
漆黒の英雄 トウコ (BW) 【閲覧注意】	14
ワイルドエリアの洗札 ユウリ (剣盾) 【シリアスあり】	20
ダイヤモンドスアドベンチャー? ひかるおまもり手に入れてから出直して来い! (剣盾)	29

## ベツドソムリエ ミヅキ (USUM)

皆さんはポケモンで好きな女主人公はいるだろうか？

ポケモンという魅力的なモンスターをゲットして育てる中で、ポケモンバトルをするトレーナー達も魅力的なのがポケモンという一大コンテンツに繋がったのだろう。

実際自分も性別男なのにルビー&サファイアの両方を買って別バージョンの方は女主人公で始めたりとかある。冒険する女主人公を見てみたいと思える程に魅力的だったからだ。

『初めましてーミヅキって言います！よろしくお願いします！』

かつて新人トレーナーである少女の先輩トレーナーとして訳あって旅の同行する事になった際、サンムーンの第七世代の女主人公であるミヅキと最初に出会った時の挨拶である。

博士から紹介されてミヅキと出会った感想は可愛くて元気そうな子だなあという印象であった。

転生してからの五年間で色々あったが、当時の自分は彼女がきちんと立ち出来る様にサポートしようと思ってたのである。

だがこれがミヅキという少女との唯一のまともなやり取りである。

知らなかったのだ。

アニポケでサトシくんの冒険に同行拒否されるレベルの少女がまともな筈がないということを経験した自分は知らなかった。

その理由を俺は身を持って知る事になるのである。

旅の途中、野宿は避ける為に到着先の街で予約していたホテルへやって来た少年少女の二人組がいた。

少年の名はコクト。転生者であり元ポケモン廃人かつ先輩トレーナーだが話すと長くなるので割愛する。

もう一人の少女の名はミヅキ。アローラで島巡りを行い、後にチャンピオンになるサン&ムーンの第七世代の女主人公である。

女の子であるミヅキの一人旅は危険ということでクワイ博士から

のお願いで先輩トレーナーであるコクトがサポートという形で二人旅をしていたのだ。

「ようやく着いたな。さて今日は夜遅いしホテル入るぞ」  
「はい」

コクトの言葉にミヅキは気の抜けた返事をしながらホテルへ入る。そしてフロントで鍵を受け取って宿泊部屋まで向かう。

本来なら付き合ってもいない男女なのだから別部屋にすべきなのだが、今ではすっかり相部屋で取るようになってしまったのを見て毒されたなあとコクトは思っていた。

旅を始めたばかりの当時、コクトは男女一緒に良くないと別々の部屋にしようとしたら、ミヅキから宿泊費が勿体ないからと別々の部屋は断固拒否された。

当時はこの娘、男の子に無警戒だから心配だ……とってたのは今は昔。

理由を知るまでコクトは純粋な娘だと思ってたのだ……

「ミヅキちゃんチェック！」

宿泊部屋の扉を開けた途端、ボフンツとベッドへダイブするミヅキ。因みに靴はきちんと脱いでから行う辺り、変なところで律儀であったりする。

「清潔感OK、弾力OK、フカフカ度OK！だが何よりも大事な〜温もり度が足りない！」

ミヅキはベッドにうつ伏せのまま感想を口にする。いつものが始まったよと呆れるコクト。

毎回宿泊部屋に行く度にベッドへ突撃してはベッドの感想を語り出すのである。

因みに以前コクトが「何だよ温もり度って……」と聞いたなら

『温もり度は前に使ってた人の温もりだよ！』

『ただの変態じゃねえか!?!』

というやり取りがあったのは余談である。

「このベッドの評価はミヅキちゃん星3つ！」

人が使っていたベッドへ突撃しては評価を降すという行為を行う

常習犯。

ミヅキはベッドソムリエを自称する変態だった。

「はあくリーリエやマオ、スイレンのベッドが恋しい」

「お前そういうこと言うからポケモンセンターの宿泊部屋出禁にされるんだぞ」

ミヅキは公共施設とも言うべきポケモンセンターの宿泊部屋で嬉々として他人が使ったベッドの感想を語り出すという変態行為をやらかしたせいでポケモンセンター側から宿泊部屋の出禁を言い渡された筋金入りの変態である。

そんな変態っぷりは流石にアニポケ放送出来ませんわ！

小さな子供達の性癖を歪ませかねない危険人物なのがミヅキなのだ。

こうして金のかかるホテルの使用をせざるを得ない理由は大体コイツのせいだったりする。

「まあ勿論、最高なのは師匠のベッドなんですけどね」

ベッドから飛び降りたミヅキはそのままコクトに抱きついてくる。別々の部屋を断固拒否する理由はコクトの使用済みベッドを使用する為という理由なのである。

「お前、引っ付くのやめろ！男女間を越えるスキンシップしてくるんじゃない」

「良いではないか、良いではないか」

引っ付くのをやめないミヅキ。こうやって男女問わず抱き付き癖も問題児と言える点だ。

思春期の男子とか美少女に抱きつかれたりしたら普通は勘違いしそうだが、今では慣れたのだ。

普通にリーリエやマオ、スイレンだけでなくククイ博士やグズマにまで気に入った相手なら抱き付く姿からこいつが異性とか気にせずスキンシップ目的の抱き付き癖があるのは周知の事実である。

まあこいつは人懐っこいのは旅をして分かってるので今更やめないのは分かってる。

「うへへ、師匠の温もりい。幸せえ」

ふにやんと蕩けるような表情をするミヅキ。人の温もりで感じる紛うことなき変態であった。

男女問わず抱き付くコイツが美少女じゃなかったら確実にセクハラでムシヨ行き間違いなしである。

「ポケモンリーグが建設されるまではだいぶ時間があるな」

「そうだねえ…ミヅキちゃんが一番乗りだったからね」

コクトの言葉にミヅキは抱き付きながら答える。

こんな変態だが、今期の島巡りではポケモンリーグが開催される予定であり、今期の出場条件である島巡りで一位通過をしているのだ。

他のトレーナー達がぬしポケモンという強大なポケモンに苦戦している中でスイスイと容易く突破するのはミヅキがポケモントレーナーとしての才能が溢れているのも要因だ。

「リーグ開始までだいぶ時間あるから厳選だね」

「そうだな。ポケモンバトルで勝つには必要なことだ」

後はポケモン廃人だった頃の三値や変化技とかもミヅキに教えた。

まあこの世界だと三値については知る人ぞ知るところである。

何せ三値が広まると起こり得る厳選作業をポケモンリーグが忌避しているからである。

良い個体値出るまで厳選作業はリアルでやるなら確実に人でなし認定待ったなしである。

まあそれをやってる俺が言うべきでは無いのかもしれないが……

そして俺の弟子に当たるミヅキも当然厳選作業を怠らないガチ勢である。

ミヅキのポケモンはメンバー入れ替えなども激しいが、現在のエースは第七世代で皆のトラウマであるミミッキュ。

可愛らしい見た目の割に特性ばけのかわであらゆるポケモンの一撃を一度だけ無傷で耐えることから、そのターンを起点につるぎの舞からの三タテするエースアタッカーである。

しかもHPが減って一撃で倒せない相手には道連れで相討ち退場まで仕掛けて来るといふ相手からしたら恐ろしいポケモンとも言え

る。

三値と特性、変化技を教えたらミツキは迷わずミミッキュの生息地であるスーパー・メガやす跡地で、ミミッキュ捕獲するまで乱獲し出した。

ミミッキュの強さを教えずとも捕獲からの孵化厳選までを特性聞いただけで即実行する辺り、ポケモントレーナーとしての才能に溢れていると言っても良い。

因みにミツキが孵化厳選する際にコクトへ厳選してないかを尋ねて来たので、遺伝技厳選済みのミミッキュとミツキのミミッキュでタマゴを孵化させたら

『えへへ、師匠とミツキちゃんの（ポケモン同士の）子供ですわね♪』

と思春期男子を勘違いさせること間違いなしの一言をサラッと  
言って来たのは余談である。

「まあ油断さえなければミツキが勝つと思ってるよ」

「えへへ、ありがとうございます」

コクトの賛辞に嬉しそうに言うミツキ。ミツキはお世辞でも嬉しい  
と思っていた。

だがこれは賛辞などではなく純然な事実としてコクトは今期のア  
ローラでのポケモンリーグはミツキの圧勝だと思っている。

因みにコクトはハウエン地方でポケモンリーグチャンピオンに  
なっているので今期のアローラで行われるポケモンリーグには参加  
していない。

彼女が圧勝すると思われる理由は二つ。

一つ目はポケモン廃人の基礎知識を叩き込み、ミツキ自体が才能溢  
れる努力家なこと。

二つ目はポケモンマスターに片足突っ込んだ化け物と呼ぶべき偉  
業を成し遂げているからである。

偉業の一つに彼女が生み出した『必殺のピカチュート』という乙技  
がある。

当時ミツキから必殺技作っただんで見てくださいと言われて、俺が教



えてもいなかったZ技の一つである必殺のピカチュートをさせられた。

必殺のピカチュートとはZクリスタル『ピカチュウZ』からのZパワーで「ボルテッカー」がパワーアップしたピカチュウ専用のZ技であり、可愛らしいダンスからの強力な攻撃を放つ技だ。

教えてないZ技を独学で習得してすごいと言えたのは可愛らしいダンスをしている時までだった。

ミツキとピカチュウの攻撃前の可愛らしい動きとは裏腹にピカチュウを空中に投げて発動した瞬間、

バチバチバチ！

ピカチュウが一軒家サイズの超巨大な電気の球体が発生する。

『は?!』

『行くよ〜』

『ピッピカチュウー!』

超巨大サイズの雷球を纏ったピカチュウが突撃し、ボウリング感覚で前方の山を消し飛ばしたのである。

明らかにポケモンバトルの範疇を越える殺戮兵器並みの技である。絆でポケモンとのZ技が強くなると聞いたことがあるが、ここまで跳ね上がるとは思いもなかった。

褒めて！褒めて！と上目遣いをしてくるミツキとピカチュウ。

コクトは女主人公おつかねえと再確認したのは言うまでもない。

他の地方でもZ技とは違うが、同じレベルで惨状を繰り返す女主人公達をコクトが弟子に持っているなければフリーズからすぐ立ち直れなかったであろう。

嫌な経験ではあるが……

何処かのジムリーダーやってる、いしのおとこが「お前ら人間じゃねえ!!」と言うのも思わず頷ける被害状況である。

サトシのピカチュウより恐ろしいピカチュウを思い知ったぜ！

勿論ポケモンリーグでやったら確実に死人が出るので『必殺のピカチュート』はリーグで禁止したのは言うまでもない。

「ミツキちゃん、お風呂入りますけど師匠も一緒にどうですか?」

「馬鹿言っていないでさっさと入って来い」

「はくい」

ミツキは宿泊部屋にあるユニットバスに入るとのことなので、風呂から出るまでの間、コクトは時間を潰すべく部屋から退出するのであつた。



「おいこっちを見て話せ」

目を逸らしてカタコトで話すユウリにコクトはため息を吐く。

今朝はユウリの希望で朝食からベジタブルカレーという軽食にはちよつと重い食事であった。

つまり、一日分の食事当番をしたいのは師匠であるコクトの負担を減らす建前で、一日三食カレーを執行したいという下心なのは見え見えであった。

彼女の特徴はカレー狂いである。

常に最高のカレーを探求すべく、水筒にスープカレーを常備して調味料感覚に何でもカレーを混ぜようとするキチガイだ。

先日は外食でデザートで注文したアイスにカレーをぶっかけようとして慌てて止めたのは懐かしい。

他にもユウリの知人からはティータイムでスープカレーを用意するキチガイっぷりから「ユウリのティータイム誘いには気を付けろ！」と畏怖されている女だ。

因みにあのどんな欠点すらも美点と褒めてくれるポップをして、「ユウリ、ティータイムで毎回スープカレーはちよつと引くぞ……」

とまで言わせた人物である。

「師匠、現在ガラルでは空前絶後のカレーブームです」

「そうだな」

それは事実である。カレーは作りやすく、失敗もしにくいことからキャンプでは人気の料理だ。

「でも一日一食じゃカレーの探求への時間が足りません」

「別にユウリのカレーは美味しいんだから良いだろう？」

「本当ですか!?!……あ、じゃなくて美味しいの探求は常に行うべきですよね！」

一瞬ペアツと笑顔を咲かせたユウリだが、ユウリの意思は硬いのか探求をしたいと言い出す。

まあ一週間位なら良いか良いだろうと妥協案を出すことにするコクト。

「つまり、ユウリは一週間三食カレーにしたいと……」

「寧ろ365日カレーで良くないですか？」

「良くないに決まってるだろうが、このカレー狂い」

「あれー？」

サラツと想定を上回る狂気を口にしたので拒否したコクト、対しておかしくないよね？…ときよとんとしているユウリ。

だが嘗めてはいけない。コイツはガチである。前に体調不良の際にその間だけ料理当番を任せたら、治るまでの三日間全食カレーを決定してきたカレー狂いである。

逆にユウリが風邪で寝込んでいた際、カレーが食べたいとうめき声を上げ続けていた程のカレー狂いなのだ。

彼女がアニポケに同行したら『料理Ⅱカレー』というレベルまで変革する食事テロリストだ。

そりゃあポケモンアニメなのに、料理の全てをカレーにしたら流石に問題になるから同行拒否されるよなあと理解したコクトである。

「身体の60%が水分なんですよ！つまりカレーは食生活において必須なんです！」

「いや幾ら何でも偏るだろう」

「大丈夫です！私が編み出した一週間のカレーメニューなら栄養バランスもバツチリです！」

「その努力を別の方向に向けろよ」

ムフンッと胸を張るユウリに突っ込むコクト。

カレーだけで栄養バランスを維持するとか並大抵の努力では無いだろう。

まあ一般人には迷惑でしか無いのだが……

「じゃあ俺は暫く、ユウリと別行動な。流石に一週間以上のカレーは飽きが来るからな」

「ええ?!駄目ですよ！そんな師匠がいなくなったら……私……」

涙目でこちらを見るユウリ。まるで見捨てられたように縋る姿に一瞬罪悪感が湧くコクト。

「私と一緒にカレーパーティーやってくれる人はもう師匠しかいないんです！見捨てないで下さい！」

「うん、一瞬でも罪悪感感じた俺が馬鹿だった。好きナだけ一人でカレーパーティーしてなよ」

「わぁーん！分かりました！もう毎日カレーなんて言いませんから見捨てないでえ！」

コクトにしがみつきながら叫ぶユウリ。

因みにこのワイルドエリアには他のポケモントレーナーもいるのだが、ユウリのカレーによるティータイムの洗礼を受けた被害者ばかりなので、同情する人は皆無である。

因みに先日やって来た新人トレーナーはコクトに彼女を見捨てるなんて最低だぞと宣って来たので、コイツを押し付けた三日後にはカレーにトラウマを覚えた新人トレーナーが涙目になりながら謝罪してきたのは余談だ。

ワイルドエリアでカレーが断絶した場合、原因はユウリなのは言うまでもなかった……

「今回は何を厳選したいんだ？」

「エースバーンが対処出来ないのが多いひこうタイプ系に対策出来るポケモンが欲しいです。エレキボールは特殊タイプで火力があまり出ないので……」

変人とも言えるべきユウリだが、ポケモンバトルにおいても天才というべき才能を持つ。

何せ彼女はエースバーン一匹でチャンピオンまで上り詰めた神童である。

無敵のチャンピオンと言われたダンデすらもエースバーンの一匹で6タテしつくし観客を啞然とさせた。

エースバーンのリベロによるタイプ変化を完璧に使いこなしたユウリは読み合いにおいて無類の強さを発揮し勝ち続けたのである。

あまりの一方的試合で八百長を疑われたせいで渋々師匠であるコクトがユウリとエキシビジョンマッチをさせられた位である。

当時のユウリのパーティーはエースバーン、ムゲンダイナ、ウーラオ

ス連撃の型、アーマーガア、オーロンゲ、ストリンダーというバランスの良いパーティだった。

直感でバランスの良いパーティを構築したのはユウリがポケモントレーナーとしての才能が高いと言える証だ。

「ひこうタイプの弱点は攻める時には岩、氷、電気が弱点だが、受けるのに有効なタイプは覚えているな？」

「電気、岩、鋼タイプですね。攻め受け両方やるなら電気か岩タイプが良いです」

「そうだ。電気、岩なら苦手なひこうタイプ相手に一方的に勝てる。だがひこうタイプは単タイプが少なく複合タイプが多い」

「そうですね。ドラゴン＋飛行やノーマル＋飛行が多いですよ。まあノーマル＋飛行は飛行タイプの弱点補完出来ないから置いておくとして、電気＋飛行とか地面＋飛行だとエースバーンは弱点付けないですから」

ポケモンは一度に四つの技までしか覚えさせることが出来ないのだが、ポケモンセンターで技の思い出しや各地にある教え技によつて様々な技を覚えさせる事ができる。

ユウリはエースバーンで勝ち抜く為に覚える技を完璧に把握しており、仮想的のタイプまでサラツと言える。因みに彼女はサンダーやランドロスとは遭遇したことはない。

つまり今のタイプは彼女が机上論で対策出来ないと思いついたタイプを口に出したのだ。最早予知レベルかよと言いたいレベルである。

「(恐ろしい才能だ。予知とも言える先見性を除いても俺があ域に到達したのは第三世代から第四世代に入る前……つまり四年近く掛けたことを身に着ける学習速度……やはり主人公だな……)」

コクトのポケモン廃人としての才能は優れたものではないが、経験や知識に置けるアドバンテージがこの世界ではある。

だが主人公という存在はその知識の吸収や上達速度が桁違いなのも事実である。

「師匠どうかしましたか？」

「いやユウリがポケモントレーナーとして成長したなど実感してたところさ」

「え、そうですか？師匠に褒められるのは嬉しいですね」

「向上心を持つのは大事なことだ。ポケモンバトルの鉄則は覚えているな？」

「はい。『ポケモンバトルにおいて勝因はポケモンのお陰、敗因はトレーナーのせい』ですね」

「そうだ。厳選や育成を終えたポケモンは最高のポテンシャルを発揮してくれる。後はトレーナーの指示一つで勝ち負けに繋がるんだ」

「確かにそうですね。あ、でも命中率は本当に運ゲーですね」

「命中率100以外は、運が絡む。俺の運命力だと良くて90%だ。それを下回ると致命的なタイミングで外すからな」

「私もトドメの一撃の際に外した際にはショックでしたね。危うくエースバーン落とされるピンチは何度かありましたし……」

「話が脱線したな。まずはワイルドエリアで岩、電気、鋼タイプを探してみようか」

「はい！」

そうして二人はワイルドエリアで厳選作業を再開するのだった。



## 漆黒の英雄 トウコ (BW) 【閲覧注意】

皆さんはビクティニ道場やタブンネボムをご存知だろうか？

ビクティニ道場とはビクティニを捕まえない限り、部屋を出ると何度でも復活し、倒すとHPの努力値を+3も与えてくれるHP努力値稼ぎには持つて来いな場所である。

因みにコクトは当時それを知らず、ビクティニを即ゲットしてしまったので、お世話になった経験は無い。

タブンネボムは経験値の高いタブンネを倒して経験値稼ぎを行うことだが、今回は余り関係ないので詳しい経緯は省略する。

重要なのはコクトの弟子であるトウコがリバティケットでビクティニと対峙した瞬間、ビクティニ道場を本能的に思い至ったことである。

「師範！お願いします！メタグロス！大爆発！」

「きゅきゅわわーん!!」

ズドーン！と部屋をメタグロスの大爆発の閃光が埋め尽くしビクティニの悲鳴が上がる。

勿論レベル15程度のビクティニでは耐えられる筈もなく戦闘不能である。

「さて、今日はどんどん行くわよ！」

「やめたげてよおー！」

トウコに縋りついて悲鳴を上げて止めようとするのはプラズマ団の下っ端の男性だった。

プラズマ団が壊滅させられてもここに残り、トウコがビクティニ道場で努力値稼ぎをする度に必死に止める人だ。

「何勝手に抱きついてんのよ！私に触れて良いのは師匠だけなんだから！」

セクハラかまして来たプラズマ団の下っ端を鬱陶しそうにゲジゲジと足で蹴飛ばすトウコ。

これどつちが悪なんだか分からねえな。

トウコさん、マジブラックと改めてコクトが思った瞬間だった……

「よし、ナットレイのHP努力値は完了ね。行きましよう師匠」

「あ、ああ……」

その惨状にドン引きせざるを得ないコクト。

元ポケモン廃人だったコクトも努力値稼ぎの為に野生のポケモンを倒したりするのは日常茶飯事なのだが、ビクティニ一匹に長時間倒し続ける行為には思わず涙を禁じ得なかった。

まあビクティニに優しくしてやろうと思いつつもHPの努力値稼ぎの為にセツカシティでマツギヨ狩りをやる辺り、同じ廃人思考なのだが……

皆さんは第5世代をご存知であろうか？

ブラック・ホワイトという作品がそうである。黒の英雄ゼクロムや白の英雄レシラムが出てくる作品である。

その作品の女主人公なのが、現在イツシュ地方で一緒に旅をしているトウコである。

アララギ博士から何時もの如く、当時新人女性トレーナーだったトウコを押し付けられたのがコクトとトウコの出会いであった。

え、一緒に旅立ったベルは？

あの娘は幼馴染のチェレンと一緒に二人旅してるよ。

トウコが旅立ちから一週間で「ベルがチェレンのチェリーを食べちゃった」とかいう変なダジャレっぽいことを聞いたが、まさかと思いつつ気にしないことにした。

カラクサタウンで再会したチェレンがゲツソリしていたとか、ベルが下腹部辺りを愛おしそうに撫でていたのはきつと目の錯覚である。

目を背けたい真実だってきつとあるんだよ……

「そういえばトウコ、ビクティニは捕まえないのか？」

「え、だって捕まえたなら勿体無いじゃない。ビクティニ道場より美味しい狩場はないわよ」

コクトはトウコへビクティニ道場の話などした覚えは無いのに、ビクティニ道場というワードを独力で導き出すからNに『漆黒の英雄』

とか言われるのである。

かつてポケモンリーグにNの城が出現した際、ゼクロムに対抗すべく復活したレシラムはトウゴに従うのを拒否した。

ポケモンの言葉が分かるNから「君は黒を通り越した漆黒だから従う気はないと言ってるよ」と言われてトウゴはじゃあ努力値稼ぎの為に倒そうと決行。

しかしレシラムは倒しても経験値が貰えずに復活するので努力値が貰えない。

これでは努力値稼ぎに使えないなと思つてたコクトだが、トウゴは違つた。

『じゃあ貴方が二度と復活する気が無くなるまで戦闘不能にするわ』

Nもコクトも啞然とさせられた。何せ努力値稼ぎという意味があるならともかく、君が復活しなくなるまで戦闘不能にするのを止めないとかキチガイの所業である。

しかもトウゴは足りなくなるPP回復の為に今まで使わずに残つてたピーピーエイド系を取り出してまでレシラムの心を折ろうとしたのである。これは言うまでもないただの私怨だつた。

余りの所業にNが「君はトモダチになんて酷いことをするんだー」とゼクロムでトウゴを止めるべく攻撃するが、トウゴは「邪魔」と片手間で呼び出したドリユウズの地震一回でゼクロムを戦闘不能にした。

せっかく苦勞して復活させた伝説ポケモンをそんな片手間に殪されたショックからか、Nは膝を付き、

『これが漆黒の英雄の力……なのか……』

と一人項垂れていた。そして漆黒の英雄の名付け親はNから始まるのである。

Nが負けた後にゲーチスが現れ、高々と語るもトウゴは無視してレシラム狩りを決行し続け、無視にキレたゲーチスがサザンドラを出すも、トウゴはまたもや「邪魔」と今度はコジョンドにとびひざげりを指示して片手間でサザンドラを倒す。

自分が片手間で倒されたショックからなのか、ゲーチスも膝を付い

て、

『フッフ、これが漆黒の英雄……私以上に恐ろしい人だった……』

と勝手に戦意喪失していた。勝手に仕掛けて勝手に崩れ落ちる様で親子が似ていたのであった。

そしてレシラムを倒す片手間でプラズマ団親子を倒したトウコはイツシュ地方の人々から『漆黒の英雄』と呼ばれることになる。勿論トウコにとって不本意なのは言うまでもないだろう。

因みに100を超えた辺りでレシラムが可愛そうだったので、トウコを止めたらレシラムが俺に感謝から自ら捕獲されるという事が起こった。

伝説ポケモン捕まえた感動よりも、コイツここまで弱ってたんだなという同情心が強かったのである。

脱線したので話を戻すと、ビクティニ道場を知った切欠はビクティニとの初見の戦闘で捕獲のHP減らしをミスってビクティニを間違って倒してしまった時である。

そして凶鑑で確認してHPの努力値+3を知った途端に捕獲を止めて努力値狩りに切り替えるポケモン育成のセンス。

やはり女主人公のポケモンに関する才能は脱帽としか言いようがない。

まあチェレンやベルから「トウコちゃんマジブラックだから気を付けてね」と警告された理由を思い知った瞬間である。

他にも最初に言ったタブンネの経験値からタブンネボムを導き出して旅の途中で経験値稼ぎしたい際は積極的にタブンネ狩りを行ったり、プラズマ団を見かけると小遣い稼ぎが目的なのか一人残らず倒して「おら、ジャンプしなさい！もつと金持ってるでしょ！」とお守り小判片手に金を巻き上げたり、……いやこれはトウコに限らずトレーナー皆やってたので関係なかった。

トレーナーとしての資質を話すなら育て屋の話をしたら『ほのあのからだ』と『そらをとぶ』を両立したポケモンはいないの？』と話してもいないウルガモスというポケモンに行き着いた神童である。

そしてウルガモスの存在を知ったら早速古代の城に向かう辺りが  
廃人思考とも言えた。

他にはトウコが廃人ロードを極め尽くしたのか、ギアステーション  
において目を瞑っていてもタマゴ5個を抱えながら一周し続ける特  
技まで身につけた。

いや、目を瞑って一周凄いのは分かるけどこれ会得しちや人間とし  
てヤバいだろ…とコクトが思ったのは秘密だ。

因みにこの時点のコクトは知る由もないが、第七世代の女主人公で  
あるミツキは厳選の為なら激突孵化を躊躇いなく行うというトウコ  
以上のインパクトを持つ特技があると思ひ知るのであった。

あの後、ナットレイを物理受けという物理攻撃への耐久力を上げる  
為に防御の努力値稼ぎをした。

防御努力値のポケモンが多いヤグルマの森で一通り努力値稼ぎを  
したトウコが満足したのでコクトとトウコはホテルへ戻って来てい  
た。

そしてトウコはホテルのベッドで胡座をしながら、うくん…と身  
体を伸ばしながら呟く。

「あゝ、かげふみシヤンデラとかいないかしら？」

「シヤンデラの夢特性はすり抜けだからなあ。残念ながら無理だな」

「もしかしたらいるかもしれないわよ？」

「いたら改造の類でレギュレーション使えないだろう」

「そうね。使えないんじゃないもの」

廃人思考の一つでバトル施設で使えないポケモンには無関心とい  
うのがある。

俺もバトル施設でルビーで捕まえたグラードンなどの伝説がポケ  
モンが、使えないと知ってから価値観が変わっていった。

自然と育成が禁止伝説のポケモンから準伝説と呼ばれるバトル施  
設で可能なポケモンや孵化厳選のポケモンが中心になっていったの  
である。

トウコもレシラムを俺が捕まえた当初は、「フツ、とんだチキン野郎

ね」とレシラムを小馬鹿にしてたが、それ以降はレシラムに対してトウコから何かはしなくなつた。

好きの反対は無関心というようにトウコにとってレシラムとはいってもいなくても構わない存在なのであろう。

そしてトウコは冷蔵庫を漁りながらコクトに尋ねる。

「ねえ師匠、イツシユ地方で格闘タイプで強いポケモンいないの？」

「ゴジヨンドが高速アタッカーだが、火力なら火炎玉で火傷にした根性ローブシンだし、他だと三闘かな」

「あ、アイスあつた……三闘、何それ？」

「4足歩行のかくとうタイプ準伝説ポケモンのことだ。コバルオン、テラキオン、ビリジオンだな」

「へへ、はむつ……ほのこはひつよいの（その子達強いのか）」

「アイス啜えながら喋るなよ……」

「ちゅぼつ…別に良いじゃない。あ、アイスを扇情的に啜えてあげようかしら？」

「食べ物で遊んでないで普通に食べなさい」

「はくい。分かったわ、おかん」

「誰がおかんだ」

トウコの悪ふざけを諷めながら三闘の説明をするコクト。

因みに幻のポケモンでケルディオもいるのだが、幻のポケモンはバトル施設では使えないのでコクトは話題には上げなかった。

「じゃあその三闘の捕獲したいわ。師匠はレシラム捕まえたから良いでしょ？」

「良いよ」

「良し！」

ガッツポーズをするトウコ。前向きなもの彼女の美点である。

「他にやりたいことはあるか？」

「うくん、何か出番を奪われた気がするからソウリユウ娘辺りをやっつけたいかなあ」

「それはやめて差し上げろ」

コクトはトウコさんマジブラックなのを再確認したのであつた。

## ワイルドエリアの洗礼 ユウリ（剣盾）「シリアスあり」

皆さんはワイルドエリアをご存知でしょうか？

ガラル地方に存在するオープンエリアであり、かなりの広さを有した場所だ。

マックスレイドバトルと呼ばれるダイマックスしたポケモンを倒して捕獲したり……

ポケモンキャンプをして手持ちのポケモンと交流したり……

オンラインでインターネット接続すると他のプレイヤー達がワイルドエリアに出現し、アイテムをお裾分けして貰ったり……

ロトムラリーというタイムアタックをやったり……

ワイルドエリアでやれることは沢山存在する。

特に、一番人気のスポットはワイルドエリア内のハシノマ原っぽい場所にある育て屋さんだ。

毎日数多くのトレーナー達が、育て屋さんにポケモンを預けてはタマゴを貰えるまで育て屋さん周辺を、自転車で円を描くように回転している暴走族も真つ青な狂気の場所である。

きつとガラルで暴走族がないのは彼等のせいに違いない。

毎日平均10人近くの自転車乗ったトレーナー達による育て屋前で一斉に回転し続ける様はパレードかなと思っただ位だ。

何せ色んな色の自転車が通った後には様々なエフェクトと言える輝きが迸るからだ。

因みにロトム自転車にはターボ機能があるので急加速されるのでむやみに近付くと危険なので注意。

偶にタイミング間違えて育て屋さんの店や店員に激突するトレーナーが続出している。

3人近くの自転車によるジェットストリームアタックを受けても平然としている育て屋さんの店員にコクトがドン引きしたのは余談である。

このポケモン世界に転生したコクトはワイルドエリアに潜る前、事前に情報収集を行っていた。

何故ならこの世界はゲームの世界ではなく、人とポケモンがきちんと生きてる世界故にゲーム感覚で生きていると痛い目に遭うことを身を持って知っていたからだ。

そしてワイルドエリアにはある恐ろしい事実が存在する。

ワイルドエリア内での新人トレーナー死亡率1%

これはとある才能に溢れた天才少女が不運を引いたが故にワイルドエリアの洗礼を受けたお話である……

「ハッ!?…ハア、ハア…夢、かあ……」

とある深夜、飛び上がるように目覚めたユウリは呼吸が乱れていた。

そして夢だと自覚して何とか呼吸を整える。

夜のポケモンセンターの宿泊施設にあるベッドでユウリは寝ていたのだ。

「どうしよう……ワイルドエリアから戻って来たのに……まだ怖いよ……」

身体を抱くように震えながらユウリは思い出す。

それは自分が初めて訪れたワイルドエリアでキテルグマに殺されたかけた時のことだった……

ユウリの冒険はワイルドエリアまでは順調だった。

一緒にポケモントレーナーになった友達のホップとポケモンバトルをしても勝ったし、今までの旅で戦ったトレーナー達にも一度も負けたことがない。

ホップが自分の兄であるチャンピオンのダンデさんを越えたいというような目標は私にはない。



ただホップに誘われたから流されてポケモントレーナーになった程度である。

けれどそれで良かった。

確かに今の私には何の目標もないが、それでも勝ち続けてきたし、旅を続けていけば何か大きな目標が見つかるかもしれない。

だからまずは自分のポケモンと一緒に強くなれば良いんだと思っ  
てた。

それが楽観的かつ愚かだと思ひ知るまでは……

最初に貰った初めてのポケモンであるヒバニーや旅の途中で捕まえたポケモン達と一緒にワイルドエリアに一步踏み出した。

そして幼馴染のホップは強いポケモンを探す為に先に進んだ。

そして私も負けないぞ！という気持ちでワイルドエリアで新しいポケモン探しをしていたのだ。

今まで見たことのない新しい野生のポケモン達、広大な湖、空は雲一つない爽やかな晴れだったから気分は最高であり、気付けばかなり奥地まで進んでいた。

そうして奴は現れたのだ。

つぶらな瞳で長い牙も鋭い爪もない着ぐるみの熊のような見た目の大きなポケモンであるキテルグマが……

目の前のキテルグマは明らかに私へ向けて駆け出しており、私はヒバニー達でキテルグマを倒そうとするもレベルが違い過ぎたのか一撃で手持ちのポケモンを倒されていく。

ホップが言っていた強いポケモンが多いと言う言葉が頭によぎって私は今になって思い知らされた。

「そんな……、私が手も足もでないなんて……」

私のポケモン達は全滅した。

私は敗北したショックで目の前が 真っ暗に なった！

野生においてそれがどれだけ危険な行為なのかを知らなかった。

ショックで呆然としていた私にキテルグマから振り下ろされるメガトンパンチを喰らうまでは……

「がはっ!？」

身体が、くの字に曲がって吹き飛ぶ。近くに壁が無かったので激突することは無かったものの、地面を転がりながら吹き飛ぶ羽目になる。

受け身の仕方なんて知らなかった当時の私は地面を転がったせいで身体中が擦り傷だらけになっていた。

「ツケホ、ツケホ……」

咳き込みながらも何とか立ち上がる。痛みには呻いてる暇はない。

何故ならここには自分一人で今も尚、自分目掛けて迫りくるキテルグマがいるのだから……

「だ、誰か……誰か、助けてえ！」

私は助けを叫ぶしか無かった。

そうしなければ目の前のキテルグマに嬲られ殺されると子供ながらに理解せざるを得なかったからだ。

だが私の周囲に人影は見当たらず、キテルグマは誰か来るまで悠長に待つつもりはなく、大きな手で攻撃を仕掛けて来る。

命からがら走ってキテルグマから逃げ出す。

何とか入口まで戻ればきつと助かるという淡い期待を抱いていた。

そしてキテルグマから逃げていた私の前に何か大きな影が現れる。

「いやっ……嘘っ……」

それは人影などという希望なんて展開ではない。

私が叫んだことで近くに人間がいると理解した二体のキテルグマであった。

逃げるつもりが囲まれてしまったショックと走り続けていた疲労から地面に崩れ落ちる。

前方には二体のキテルグマ、後方から追い掛けて来るのは先程まで私を襲ってた一体のキテルグマ。

ポケモンもない……いや、いたとしても、キテルグマに一撃で倒される程度のポケモンが何匹いようが同じであった。

「いやあ……死にたくないよお……お願いしますう……誰か助けてえ……」

それでも私はもう助けを求めるしか無かった。後方のキテルグマ

が追い付き、三体のキテルグマに囲まれる中で私は恐怖から思わず目を瞑ってしまおう。

「エーファイ、サイコキネシス！ポリゴン2、ほうでんだ！」

ブオン！と風切り音と共に後方にいたキテルグマが真横へ吹き飛ばぶ。

バチバチバチ！

そして前方にいた二体のキテルグマへ向けて、私とキテルグマの間に入ったポケモンがほうでんを放って、キテルグマ2匹へ電撃を放った。

グマア!!

キテルグマ2匹は電撃を浴びながらも大きな手で攻撃を仕掛けてくる。

「ポリゴン2、受け止めろー！」

二体がかりの攻撃をポリゴン2と呼ばれたポケモンは一步も引かずに受け止める。

もしここで避ければ後ろにいる私に攻撃が当たるからだ。

ポリゴン2と呼ばれたポケモンは頑丈なのか、キテルグマ2匹からの同時攻撃を受けても一步も後退せず受けきった。

そしてポリゴン2が受けてくれたタイミングでキテルグマの一匹が隣のキテルグマへ高速で吹き飛んで激突する。

ピンク色の猫のようなポケモンが放ったサイコキネシスでキテルグマを攻撃しながらもう一匹に激突させることで私とポリゴン2から距離を空けてくれたのであった。

「良くやったポリゴン2」

そしてやって来た少年はポリゴン2の頭を優しく撫でるとポリゴン2は嬉しそうに鳴いた。そして少年は私に向けて言う。

「もう大丈夫！助けに来たよ」

私を安心させる為にはつきりとした口調で少年は笑顔で言う。その言葉に私は安堵したのだった。

その出会いが、後の師匠になる人との出会いだった。

そうしてキテルグマを倒した少年は私をポケモンセンターに連れて行き、応急手当を行った。

ポケモンセンターではポケモン以外にもポケモントレーナーが怪我を負った際の緊急医療が出来るようになっており、そこで私も手当てして貰ったのだ。

そして手当てが終わり、医務室から出た際に少年がいた。

「念の為に確認だが、大丈夫かい？」

「はい、助けていただきありがとうございます！」

私はお礼を言つて頭を下げる。

「あの、ところでお名前は？」

「俺の名前はコクトだ。世界各地を旅するポケモントレーナーだ。君の名前は？」

「私はユウリです。コクトさんが助けてくれなかったら私……」

「いや、君は運が良かっただけさ。あのワイルドエリアは高レベルのポケモンもうろつく危険な場所。」

「少ないとはいえ、新人トレーナーの1%は命を落とすと言われていくからな」

「1%……」

コクトさんの言葉に私は思わずゾツとする。普段の私なら少ないんですねと楽観視してただろうが、先程までその1%に遭遇していたからこそ他人事では無かった。

「ワイルドエリアには強いポケモンが多いから、野生のポケモンは避けて通れとか、単独行動するとか言われなかったかい？」

「いいえ……言われなかったです……」

首を横に振って答える私にコクトさんはため息を吐く。だが当時の私は旅での連戦連勝に浮かれていたのだろう。

ホップやソニアさんは確かに言っていたのだが、話半分にしき聞いていなかったのだと後になって知ったのである。

「この安全対策が杜撰だな。せめてどちらかを実行してればキテルグマに囲まれる事態は避けられただろうに……」

コクトさんの言葉に私は確かにと共感する。

もし野生ポケモンを避けて通るようになればキテルグマと遭遇することは無かつただろう……

もし単独行動せずに他のポケモントレーナー達と旅をしていれば、協力し合うことだって出来ただろう……

新人トレーナーなのに一人前だなんて慢心してたから命を落としかけたのである。

「今日は安静にしておくんだ。俺も今日はここで泊まってるから何か困った時には訪ねてきて構わないよ」

「ありがとうございます」

そうして私はコクトさんと別れて自分の部屋に戻る。そうして一人になり、眠りにつくと思い出すのはキテルグマに襲われる光景。

とてもじゃないが、一人で眠れる気がしなかった……

手持ちのポケモン達も戦闘不能だった為に今は別室で休んでいるからこそ、頼れない。

私は助けてくれたコクトさんに縋っていたのだろう。

気付けばコクトさんの泊まる部屋に来て、コンコンコンとノックをした。

そして扉からはパジャマを着て寝ていたコクトさんが出てきた。

「んっ……ユウリか、どうしたんだいこんな夜遅くに……」

「あの、コクトさん。一緒に……寝てくれませんか？」

「んんっ!？」

いきなり何を言うのかと思ったコクト。

深夜だったから眠気ながらのつもりが一気に目が覚めてしまった。

だがユウリの表情を見てコクトは色めきだつた話とかではなく、不安や恐怖を抱えた一人で眠れないものだど理解する。

何よりかつての自分も同じような時があったからこそ共感出来たというのもあった。

「そうだな。確かにあんな目に会えば、一人は怖いよな。良いよ、一緒

に寝ようか」

「し、失礼します」

部屋にユウリを入れてポンポンと自身のベッドへユウリを招き入れるコクト。

「ユウリ、手を握っても良いか?」

「は、はい……」

ユウリはおずおずとコクトの手を握る。

「俺も最初に旅をして怖い目にあつた時に手を握って貰つたんだ」

「コクトさんも私と同じような目に遭つたんですか?」

「そうだよ。まあ俺の場合は、運良くボロボロになつても街まで一人で逃げ切れたんだけど……」

「助けは……来なかつたんですか?」

自分のように誰かが助けに来てくれたのではとユウリは思つてしまつたので思わず尋ねてしまつたのだ。

「ううん、そんな都合良く人は来なかつた。おとぎ話のようにヒーローでも来てくれれば良かったのにね」

「でもコクトさんは……私のヒーローでした……」

「残念ながらヒーローとは真逆かな。俺は強いポケモンを厳選してただけだから」

「厳選?」

「そう、同じポケモンでも強いポケモンと弱いポケモンは存在する。強いポケモンを俺は探し続けてたんだよ」

「強いポケモン……」

「命を落としかけたことで分かつたのは、本当に命の危機に直面した際、頼れるのは強いポケモンだつてことだ……」

「確かに……そうですね……」

私はその言葉に共感していた。先程私が手も足も出なかつたキテルグマ達相手にコクトさんのポケモン達は圧勝していた。

サイコキネシスでキテルグマを一撃で倒し、ポリゴン2は二体がかかりの攻撃を同時に受けても耐えきる耐久力を備えていた。その頼もしさは強いポケモンでなければ実現しなかつたであろう。

「コクトさんもジムチャレンジですか？」

「いや俺は違うな。俺はハウエン地方の元チャンピオンだからガラル地方のポケモンリーグに参加するつもりはないよ」

「元チャンピオン……コクトさんは凄いですね……」

「ありがとう。と言つても俺はチャンピオン職に興味が無いからすぐ辞退したんだけどね」

「チャンピオンって凄いじゃないですか！」

「いやチャンピオンとか変人ばかりだよ。石収拾して会議サボる御曹司とか、考古学者なアイス狂いとか、トレーニングサボってたせいで厨二病に敗北する爺さんとか、フラダリクソゴラグランプリとかやらかす女優とかな」

「チャンピオンって変人ばかりなんです。ダンデさんもそうなんです。しょうか?」

「デパートの迷子のお知らせで呼ばれる大人をまともとは呼びたくないなあ……」

「その光景はビツクリですね」

私はその光景を浮かべて思わずクスクス笑う。先程までの恐怖の感情は和らいでいった。そうしてコクトさんと話していると眠気が出てきたのでそろそろ眠ることにする。

「おやすみユウリ」

「おやすみコクトさん」

そして二人は眠りについたのであった。

そして私が勝手に部屋を抜け出してたので、ジョーイさんに迷惑をかけてしまい、

朝一でコクトさんと一緒にお説教を受けたのは余談である。

ダイマックスアドベンチャー？ひかるおまもり手に入れてから出直して来い！（剣盾）

皆さんは『ひかるおまもり』をご存知だろうか？

ガラル図鑑を完成させると色違いの確率を3倍にしてくれるアイテムだ。

コクトがこの世界に転生する前の剣盾のポケモンゲームで400匹集めるとか過去作とGTSがなければ確実に詰んでいたのが懐かしい。

リアルで交換出来る友達とかいないとオンライン交換は持ち逃げされるリスクが怖くて通信交換で進化するポケモンはまず埋められない。

だから進化後のポケモンをGTSで漁ったりして漸く埋めたのである。

まあこの世界にもGTSあったのは意外だが……

ひかるおまもりの効果をたった3倍と侮るなかれ。色違いの確率がそもそも低く、一番確率の低い状態が1/4096というスタートだ。

一匹に約4000匹近く遭遇するとか狂気の沙汰としか思えない。

孵化なら外国産のポケモンと合わせる通称【国際孵化】や野生ポケモンなら捕獲か倒すカウントを最大500匹することで確率を上げたりするという涙ぐましい努力を行なっているのだ。

そして剣盾ではダイマックスアドベンチャーというポケモンを捕まえられる場所の確率は解析らしいが何と1/100と今までの色違い厳選よりも遥かに高確率という夢のような場所である。

多くのポケモン廃人達が寝食削ってまで潜る程である。

そしてここにもガラル地方のジムチャレンジを突破してチャンピオンリーグ開催までの空いた時間で潜る奴等がいた……

「だアアアア！全然色違い出ませんね！」



「まだ1日半しか潜ってないからなあ」

悲鳴を上げるユウリとは対照的にコクトは落ち着いていた。

「というかコクト自身は出れば良いな位のレベルなのだが、ユウリは本腰入れて色違い厳選しに来ているのだ。」

「ボール100個近く消費したのに未だにお目当ての色違いカプ・レヒレが出てこない……」

「まあ道中捕まえた中で他の色違い出てきたし順調だろうよ」

「師匠はアローラでカプ・レヒレ厳選したから良いんでしょうけど、私もカプ・レヒレ欲しいです」

「いやお前確か水タイプでインテレオンいなかったか?」

「ハハハ、何言ってるんですか師匠。ガラル御三家はゴリランダー、エースバーン、ウオノラゴンでしょう?」

「酷いな……まあ俺も水タイプだとインテレオン使わないけど……」

ユウリの中ではインテレオンはガラル御三家じゃないらしい。

いやインテレオンが悪いわけじゃない。

水タイプで最も優秀なカプ・レヒレ以外にもインテレオンより優秀な水ポケモンが多いのが悪いのだ。

マリルリやギャラドス、ラグラージとか……

先程ユウリが言った頑丈顎とエラガミのお陰で高火力出せるウオノラゴンとか……

ダイマックスさせるならキョダイマックススラプラスのキョダイセリッツでのオーロラボール貼りとか……

ぶっちゃけ水タイプ単体だと火力不足や耐久性不足気味なのがあるめないのだ。

因みに同じ単タイプであるエースバーンはリベロで攻撃時にタイプ変えられるからタイプ一致で火力の底上げ出来るし、ゴリランダーはグラスメイカーのお陰で拘り鉢巻持たせての先制グラススライダーで有利タイプには何もさせずに退場させたりと活躍している。

特性と覚える技範囲が広いからあの二匹は流石としか言いようが無いかった。

「25匹近く捕まえて出て来た色違いはドラピオンとストリンダーの

「二匹ですね」

「後はてんねん特性のヌオーは割と有難かったな。既に持つてる色違いヌオーは通常特性だからランクマ使えないし……」

「特性パッチありますよ?」

「マックス鉱石200個で漸く手に入れた一個だからな。色違いサンダーに使う予定だ」

「確か師匠の色違いサンダーは厳選途中で出て来たんでしたっけ?」

「そうだ。何百と繰り返し返したら偶然出てきたから個体値厳選中断して捕獲したのが懐かしい」

「でも師匠、サンダーの色違いって全然見分け付かないんですけど……」

「ぶつちやけ通常色と見比べでもしないと俺も判別出来ない。足と嘴の濃さが良く見ると違うとかいうレベルだ。」

「ラッキーやリザードンみたいに色が全然違うと分かりやすいんですけどね」

「黒はともかく緑や黄色みたいに単一色系とかは好き嫌い分かれるよな。ラッキーの薄い黄緑色が苦手ですぐハピナスに進化させちゃったし……」

「ポリゴン2とポリゴンZの青色の色違いは気に入ってますよね?」

「嘴や足部分が銀色っぽくて青と別れてるから格好良いんだよ。まあ俺が気に入っててもユウリは気に入らない色違い色とかもあるだろうよ」

「私もポリゴン2は可愛いと思いますよ?」

「あ、確かにそうだな。俺は色違いを格好良い基準で思ってたが可愛いとかも多いもんな」

「師匠から凶鑑で見せてもらったメガサーナイトの黒いドレスみたいな色違いは実物見たいなあ……ガラルだとメガ進化ないのが残念……」

「メガ進化、ガルットモンスター……うっ、頭が……」

頭を抑えて唸るコクト。

対戦がほぼガルーラ祭りだった第七世代までのメガ進化時代のト

ラウマの記憶がよぎったのである。

まあガルーラ全盛期並みに一匹の夢エースバーンでジムチャレンジを蹂躪したユウリが目の前にいるのは余談である。

「師匠が好きな色違いポケモンは何ですか？」

「俺は色違いブラッキーが一番気に入ってるな」

「黄色の模様が水色なのは確かに可愛かったですね」

かつて色違いブラッキー欲しさにひかるおまもり未所持なのにも関わらず国際孵化をしまくってたコクトだが、孵化厳選で20ボックス分がイーブイで埋め尽くされた辺りで挫折し、最終的にはGTSで色違いブラッキーを手に入れたりしたのは余談である。

「カプ・レヒレの色違いは黒色なんですよね？」

「カプ系は4匹全員が黒色になるから美しいよ」

「じゃあますます厳選頑張らないとですね！」

「いや流石にチャンピオンリーグ開催前は間に合わないだろうな……」

ユウリが第一突破したとはいえ、チャンピオンリーグ開催まで後一週間

で出会えるかといえば望み薄である。

「後はある程度ポケモンの技の知識ない人達と潜るとほぼカプ・レヒレ捕獲前に詰みますよね。あられ降ってないのにオーロラボールを二連発された時はキレそうになりましたし……」

「俺は事前に知れる最奥にいる伝説ポケモンのタイプで水タイプと出てるのに炎タイプのポケモン変えずにマルヤクデのまま挑むチャレンジ精神に驚いたな」

「ありましたねえ。カプレヒレの追い詰められた時になみのり打たれて最後の一回分を退場させられたりとか……」

ハツハツハツと笑うユウリだが、数回前のダイマックスアドベンチャーで追い詰められたカプ・レヒレからのなみのりで、他の仲間のマルヤクデが瀕死になり、4回目の瀕死からの強制退場した際には悲鳴を上げてたの言うまでもない。

ダイマックスアドベンチャーで相性不利なタイプで挑むと冗談抜

きにやられる教訓を何度も味合わされたのである。

弱点付ける技を持つてる相性不利ポケモンより弱点突かれないタイプのポケモンに交換した方が良いまである。

複数回瀕死状態にさせられての強制退場という洗礼で捕獲失敗を何度も繰り返されるからだ。

そうして二人は色違いカプ・レヒレを捕獲する為に潜り続けるのであった。